

稲作の機械化

（機クボタのホームページ）  
 「望がある。だから、行く。」のタンザニア編では、KATC（キリマンジャロ農業研修センター）のシャウリタンガ校長が、タンザニアにおける稲作の重要性を述べ、続いて農家のジョージ・アモシ・リッサさんが、クボタコンバインを入れて農作業が省力化され、生産性が上がったこと、ジョイス・ルヒエさんが農機のおかげで子ども達を畑で働かせる必要がなくなり、学校へ行くようになったと喜びを語っている。

田植えや乾燥の機械化も

クボタによると、アフリカに最初に農機を輸出したのは1989年で、ODAにより商社経由でエジプト、南アフリカ、チュニジアへ出荷したという。2010年に本格的に市場開拓に取り組みようになった。2017年にはケニアに拠点を設けた。

現在は、トラクタ、普通型コンバイン、エンジン、耕うん機、発電機などを輸出。タンザニアでは「アグリコム社」がディスプレイーターとなり、これら機種の拡販と保守・メンテナンスに当たっている。



担当者は、新型コロナウイルスで直接の研修ができず、オンラインで整備技術を学んでもらった、と話す。

我が国の機械を普及させるに当たっての大きな課題が、部品の供給とメンテナンス体制である。クボタが評価される背景には、そうした体制作りも影響している。

視察したローアモシ灌溉地区の近くで、トラクタのロータリを修理している現場を見たが、業者は地域の何でも屋さんで、農機の専業というわけではなかった。

機械が普及すればするほど、それを支える業者も必要となる。中には、モンボ灌溉地区のように、ある程度の故障なら自分たちで直せるというところもあるが、補修・メンテナンスの体制作り・強化は今後さらに力を入れなくてはなるまい。

機械化という面では、今後田植えがどうなるかも注目された。直播か、我が国方式の田植機か、どちらなのかと。というのも、人手不足で田植えをする人が集まらない状況が生まれつつあるからだ。人件費も上昇している。

田植機の導入には、苗作りからの機械化システム構築の問題が、直播には鳥害が、それぞれ立ち回る。しかし、苗圃連や田植機のメーカーにとっては、我が国の田植システムを海外展開していくチャンスかもしれない。

また、乾燥工程も問題で、現状の天日乾燥では過乾燥や急激な乾燥による胴割れなど、品質の悪化がある。循環式をはじめとした乾燥機の導入、あるいは天日乾燥でも胴割れや過乾燥を起さなない装置の導入も考えられるのではなからうか。

そうした機械化がタンザニアの稲作をはじめとした農業の生産性向上を導くのは確実だろう。ファイカットの貢献が期待される。

（つづく・遠藤記者）

現地に導入されたクボタの普通型コンバイン④、籾の乾燥はコンクリートの床で行う⑤